

岳たけの幟のぼり

(別所温泉)

今から五百年くらい昔のはなしだ。

この別所温泉の辺りはもともと雨の少ない所だが、その年はちっとも雨の降らない夏で、ひでりが続いておった。

畑や田んぼもカラカラに乾いて、作物は何一つ実らない。

村の衆は、あらゆる雨乞いをやってみたが、何の効き目もあらわれなかった。

これが最後のお願いと、別所村の奥にある夫神岳で、水の神様である九頭龍王さまにお祈りをしようということになった。

「雨ふらせたんまいな」

「大雨降らせ給わば、あらんかぎりのお供え奉りそうろう」

と唱えて、夫神岳の頂上に登り、長い布を振りかざして竜神を呼びながら、まつりを行ったと。

すると不思議や、

夫神岳の頂からまっ

黒い雲が湧き起り、

女神岳の方角に押し

寄せ、山を覆ったか

と思うと、どっと大

雨が降り出し、三日

も降り続いたんだと。



この雨のおかげで今にも枯れそうだった作物が甦よみがえった。

そこで、喜んだ村人が お礼として夫神岳の上に九頭龍権現を祀って、毎年幟をあげることにした。これが別所温泉のお祭りである「岳の幟」の始まりという。

毎年七月十五日の朝早く、青竹に色とりどりの反物を繫げた幟を山の上に立て、九頭龍権現にお参りしたあと、山を下って温泉街を練り歩くお祭りだ。

今では三頭の獅子舞いと、女の子のささら踊りが加わって賑やかな祭りになっている。

ところで、夫神岳の向こう側は青木村で、ここも雨の少ないところだ。

山の上に九頭龍権現のお宮を建てるについて、お宮の向きを青木側にするか別所側にするかでおおめだった。

そこで両方の村で相談の末、牛と馬を競走させて山へ登らせ、勝ったほうの村の方へ向けることになった。

さて、牛と馬どちらをとるか籤くみ引きしたら、青木は馬、別所は牛となった。

青木の馬は勢いよく走って登っていった。別所の牛はのろのろゆっくり歩いていく。別所の衆はがつくりと頭をかかえていた。

ところが、馬は途中で疲れて登れなくなつて、ゆっくり行つた牛が先に登ることが出来た。それで、お宮は別所村に向くことになったという。

このことを喜んだ別所村では、一番上にあるお湯を「牛湯」と名づけたのだが、それがだんだん訛なまって、今の「石湯」になったということだ。